

養育者の語り合いにおける ファシリテートのあり方に関する検討

西本佳世 瀬々倉玉奈
(児童学科卒業生) (児童学科)

現在行われている子ども・子育て支援活動は、大きな枠組としては共通していても、その実施形態や方法、意図する目的は多岐に渡っており、個々の実践過程を客観化したうえで広く活用できるような理論化までには至っていない。本学児童学科では2017年度より子ども・子育て支援による地域貢献と学生の学びとを目的にした複数のプログラムからなる「京都女子大学親子支援ひろばびっばらん」の活動を来室・対面型で開始している。過去に実施した親子分離を基本としたクロウズド・グループにおける養育者間の語り合いを分析対象としたところ、ファシリテートのあり方によって語り合いに質の違いが認められたので報告する。

キーワード：養育者支援，母親，ファシリテート，内省，親子分離

1. 問題と目的

現代の日本における子育て環境は、核家族化、地域のつながりの希薄化、少子化、男性の育児不参加、出身地以外での子育ての増加など、多くの問題を抱えている。こうした子育て環境を背景として、子育て不安の深刻化や蔓延化が認められ、児童相談所が扱う児童虐待件数は増加の一途を辿っている。

厚生労働省(2015)の「人口減少社会に関する意識調査」によると、子育てをしていて負担・不安に思うことがあるかという質問に対し、「どちらかといえばある」が43.6%と最も高く、次いで「とてもある」が28.8%であった。具体的な負担・不安内容としては「配偶者が育児や家事に協力的でない」「子育てについて相談する相手がない」という回答が示された。約7割以上の養育者が子育てに対して不安を感じており、子育ての孤立化が関係していることが理解できる。

さらに、内閣府(1997)の「国民生活選好度調査」によると、「育児の自信がなくなる」「自分のやりたいことができなくてあせる」「なん

となくイライラする」という3つの子育て不安に関する質問項目に対し、いずれも共働きの母親よりも専業主婦の母親の方が「よくある」と回答しており、共働きの母親よりも専業主婦の母親の方が、子育て不安が高いことが明らかになっている。このような事態を受けて、子育て中の親子が気軽に集い、親同士が交流したり、子育ての不安・悩みを相談したりする場を提供することを目的に地域子育て支援拠点事業が推進されるようになった(厚生労働省, 2019)。

児童福祉法改正に伴い2009年に法制化された地域子育て支援拠点事業は、一般型と連携型に分類される。一般型は、保育所等の常設の地域の子育て拠点を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取り組みを行っている。また、連携型は、児童館等の児童福祉施設等、多様な子育て支援に関する施設に親子が集う場を設け、子育て支援のための取組を実施している(内閣府, 2015)。2020年現在、全国の7,578か所で地域子育て支援事業が実施されており、その数は年々増加しているが、大半が一般型として実施されている(厚生労働省, 2019)。

表1 ハイブリッド型による「びっばらんシリーズ」と「びっばらんど」(瀬々倉, 2020 R)

プログラム	ハイブリッド型(オンラインによる双方向型・オンデマンド型)		従来の来室・対面型	
	びっばらんシリーズ	びっばらんど	びっばらんシリーズ	びっばらんど
対象	字幕が必要な親子 英語が必要な親子 乳幼児期の親子 兄弟姉妹 居住地域に限定されない		日本語が話せる親子 幼児1人と養育者のみ 近隣在住	
関わり	ブレイクアウト・ルームで 家族毎に個別対応 日英の字幕付き 英語対応	複数の親子に 一斉に対応 字幕付き	親子分離 子どもはマンツーマン	複数の親子に 一斉に対応
内容	個別対応の 親子遊び	合同親子遊び	感触遊びを中心とした 発達促進的アプローチ 養育者向けプログラム	合同親子遊び
配信	双方向型	双方向型 オンデマンド型	なし	なし

一方、本学児童学科では、上述した社会情勢を受けて2017年度より乳幼児保育・教育及び心理学的なアプローチによる子ども・子育て支援を実践し、並行して保育学生を支援者として養成する「京都女子大学親子支援ひろば びっばらん」の活動を開始している。来室・対面型によって始まった複数のプログラムについては、その都度支援のあり方を検討しながら実施しており、2020年度と2021年度のコロナ禍においては、オンラインによる双方向交流型の活動を実施した。表1は、従来の来室・対面型と、オンラインによる遠隔双方向型を中心としたハイブリッド型とを比較したものである。なお、コロナ禍では後述する「おしゃべり・さろん」が実施できていない。

びっばらん活動のコンセプトを以下に示す(瀬々倉, 2020)。

- ① 未就園児とその保護者を対象の中心とする。
- ② 家庭ではなかなか経験できない豊かな遊び体験を提供する。
- ③ 子どものみならず養育者にとっても意味のある体験を提供する。
- ④ 豊かな親子関係をつむぐことに貢献する。
- ⑤ 親子との関わりの中で、学生が親子への学びを深める。

表1中にある「びっばらんシリーズ」は、既述した養育者の育児ストレスや不安の軽減、延いては良好な親子相互交流を促進することを目

的に、敢えて親子分離を基本として実施しており、子どもと養育者のプログラムを同時並行で実施することを特徴の一つとしている。また、親子分離をした子ども1人に対して1人の保育学生が担当者として寄り添いながら遊びを展開し、一方の養育者グループに対しては、第2筆者が臨床心理学的なアプローチを行う他、外部講師によるヨガを行っている。このような特徴を活かすためにクロード・グループによる活動としている。

本稿で扱う2018年度と2019年度の「びっばらんシリーズ」のプログラムを表2と表3に示す。「びっばらんシリーズ」は、2017年度に3回連続のプログラムとしてスタートしたが、参加した母親からの「実施回数を増やしてほしい」「もっと母親同士で話す時間を増やしてほしい」との要望を受けて、2018年度からは4回連続とし、養育者用のプログラムとして「おしゃべり・さろん」を加えることとした。回数を増やすことによって、子どもの活動についてもより段階を踏んで遊べる内容へと変更をしている。なお、子ども・子育て支援における親子分離という逆説的な実践の効果については瀬々倉(2013)に譲ることとする。

先述した地域子育て支援拠点事業の効果については、中谷(2014)の調査によって明らかにされている。地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化をみる15項目の中で、「子育ての疲れが軽減されるようになった」「子育てにつ

表2 2018年度「びっばらんシリーズ」のプログラム（来室対面型）

日程	形態	子どもの活動内容	養育者の活動内容
7月13日(金) 10:00~11:30	親子合同	こねこね、ねりねり ～こめこ かたくりこ ねんど～ ※初回のみ親子合同	
7月27日(金) 9:30~11:00	親子分離	手形のおぼけ、 ヒュードロロ	おしゃべり・さろん
8月3日(金) 9:30~11:00	親子分離	ぺたぺた、ベッタン ～フィンガーペインティング～	らくがきゲーム ～子どもと心を通わせる 手がかり～
8月10日(金) 9:30~11:00	親子分離	元気いっぱい！ 楽しくからだを動かそう！	ヨーガ ～こころとからだをほぐす～

表3 2019年度「びっばらんシリーズ」のプログラム（来室対面型）

日程	形態	子どもの活動内容	養育者の活動内容
7月31日(水) 9:30~11:00	親子合同	こねこね、ねりねり ～こめこ かたくりこ ねんど～ ※初回のみ親子合同	
8月3日(土) 9:30~11:00	親子分離	ぎゅー、タッチ！ ～ふれあいあそび～	ヨーガ ～こころとからだをほぐす～
8月6日(火) 9:30~11:00	親子分離	ぼんぼん、コロコロ ～スタンプあそび～	らくがきゲーム ～子どもと心を通わせる 手がかり～
8月8日(木) 9:30~11:00	親子分離	ぺたぺた、ベッタン ～フィンガーペインティング～	おしゃべり・さろん

いての精神的負担が減った」「子育てに関する知識や情報を得ることができた」「支援センターを利用することで、子育て中の仲間が増えた」といった育児負担の軽減と資源の活用項目の平均値が高いことが示されている。母親は地域子育て支援拠点事業を利用することによって、身体的な疲労や精神的負担の軽減を図り、育児情報の取得や活用、仲間づくりなどを行っていることが理解できる。

さらに、橋本（2017）は、地域子育て支援拠点事業の中で「対話の場」を提供することが、母親にとって有効なサポート源であるとしている。「対話の場」を通して、自身の子どもに関する悩みをじっくり聴いてもらうことや母親同士がお互いに子どもに関する悩みを共有してアドバイスし合うことにより、母親の心理的負担が軽減されており、「対話の場」は、ピアサポートの場として機能しているのである（橋本、

2017 前掲）。

これらの先行研究により、地域子育て支援拠点事業は、子育ての不安・悩みを軽減する有効な支援の1つであると捉えることが可能である。母親が支援者や母親同士で話す機会となる「対話の場」は、地域子育て支援拠点事業の重要な機能の1つである。

では、「びっばらんシリーズ」における養育者支援プログラムの1つである「おしゃべり・さろん」では、どのような語りが開示されているのだろうか。2018年度に実施した「おしゃべり・さろん」については、前川（2018）によってヴォーカル・データが逐語録化されたのちに内容分析が行われている。さらに松本（2019）は、2019年度のヴォーカル・データを逐語録化した後に、内容分析を行いカテゴリーを試みている。

本研究の目的は、松本（2019）が作成した

カテゴリズを用いて、2018年度に実施した「ぴっぱらんシリーズ」における「おしゃべり・さろん」での母親の対話内容について再分析を試みることである。さらに、松本によって作成された2019年度の結果と筆者らが再分析した2018年度の結果とを比較検討することによって、今後の養育者間の語り合いにおけるファシリテートのあり方について考察する。

2. 研究方法

2.1 分析方法

本研究は、以下の手順で行った。

- ① 松本(2019)が作成したカテゴリズを用いて、前川が作成した2018年度の「ぴっぱらんシリーズ」における「おしゃべり・さろん」での養育者の対話内容の逐語録を再分析する。
- ② 松本が行った2019年度の結果と筆者らが再分析した2018年度の結果を比較検討する。
- ③ ②の結果をもとに、新たなカテゴリズを検討する。

2.2 分析対象

本研究は、前川(2018)及び松本(2019)によって作成された各年度の「ぴっぱらんシリーズ」における以下のデータをもとに行った。

- ① 2018年度の逐語録(以下、【2018年度逐語録】とする。)2019年度の逐語録(以下、【2019年度逐語録】とする。)
- ② 2018年度・2019年度の「ぴっぱらんシリーズ」実施回毎に参加者である養育者を対象に第2筆者が実施した質問紙調査の結果(瀬々倉、未刊行)
- ③ 2018年度・2019年度の動画記録

上記のうち①を主な分析対象とし、②③については分析を進める上で、補足的に用いた。

2018年度の参加者は、5名の母親(平均年代は、30歳代前半)と5名の幼児(平均年齢は、1.82歳)である。また、2019年度の参加者は、6名の母親(平均年代は30歳代前半)と、1歳9ヶ月～3歳0ヶ月の幼児(平均年齢は、2.05

歳)である。

なお、①のいずれの年度もファシリテーターは第2筆者の瀬々倉(公認心理師・臨床心理士)が務めているが、進行の方法を変えている。2018年度は、出来る限り参加者が自由に話すことを重視して進行しており、2019年度は、前もって話題にしたい内容を訊ねた上で進行している。

各年度のファシリテートの詳細は以下である。

(1) 2018年度の「おしゃべり・さろん」

2018年度の「おしゃべり・さろん」当日は、来室→親子分離→身体ほぐし(アイスブレイク)→語り合い→質問紙調査→子どもと合流という流れで進められた。「おしゃべり・さろん」当日が初めての親子分離となったため、母親同士の関係づくりを意識することと、あまり参加者の内面を深く掘り下げ過ぎないように注意して進めた。

プログラムには4回生2名、3回生1名が同席し、対話内容を卒業研究などに活用することに了承を得て進めた。また以下の3点は、予め質問項目として用意しており、その後の展開はファシリテーターの判断によって進めた。

- ① 冒頭に導入として自己紹介と親子分離経験の有無について質問する。
- ② 前川の希望で、児童館に望む乳幼児親子向けイベントについて質問する。
- ③ 3回生が語り合いに同席する中で感じた疑問を質問する。

前川は、「おしゃべり・さろん」に同席し、参加者に許可を得て、ICレコーダーでの録音とビデオ撮影をおこない、録音したデータを逐語録化し、対話内容を分析している。

研究結果として、親子分離した状態の母親グループによる語り合いにおいては、カタルシスの経験が生まれることや、セルフ・ヘルプ・グループ、ピアカウンセリングに似た効果があると考察され、親子分離で語り合う場を設けることに意義があるとしている。

(2) 2019年度の「おしゃべりさろん」

表4 2019年度の「おしゃべり・さろん」における母親の対話のカテゴリライズ（松本, 2019 を瀬々倉が改定）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	対話内容
子育てに関する悩みの共有	子どもの病気	101 手足口病について	Q.帰宅後に手だけでなく、足も洗った方が良いか。 A.足も洗った方が良い。 Q.手足口病を予防するための掃除について A.ノロウイルス対策の消毒液で拭くと良い。 Q.子どもがまだうがいをするのが難しい時、どうすれば良いか。 A.ゆすぐだけでも効果がある。
		102 口内炎について	Q.口内炎で野菜が食べられない時の食事について A.長引くようであれば病院でビタミン剤をもらい、痛みを和らげてから少しずつ食事を与える。
	子どもが2人以上いる時のきょうだいの関わり方	103 上の子に関わる問題	・下の子に手が出てしまう時、上の子に何をどこまで言うべきか難しい。 ⇒下の子が赤ちゃんの間は、下の子の世話が終わった後の時間は、上の子に手をかける。だめなことは時には、きちんと教える。
		104 子育て支援事業の利用について	・ファミリーサポート等を利用する時、上の子と下の子のどちらを預けるべきか。
	育児制度・育児環境	105 居住市について 不満に感じること	・居住市だけ3歳から医療費が上がる。水道代が高い。 ・市民税が高い。
子育て支援機関の利用	子育て支援機関利用時の親子の姿	106 子育て支援機関の利用状況と利用時の子どもの様子	・児童館利用時、母親にくっついて離れない。プレ幼稚園もびっばらんも行くのを嫌がったが、きちんと話せば納得してくれた。 ・プレ幼稚園もびっばらんも行きたくて仕方がない。 ・児童館の利用人数が多く、行くと必ず風邪や手足口病になる。 ・区役所利用時に親子分離した時も問題なかった。 ・今までは分離しても平気だったが、迷子になった経験から、母親の姿が見えないと不安がるようになった。びっばらんシリーズの親子分離1回目に泣いていた。
		107 子育て支援機関利用時の母親の心情	・離れる理由をきちんと話せば分かってくれる日もあり、成長を感じる。 ・ずっと分離してくれて助かるが、もう少し寂しがつて欲しい気持ちもある。 ・分離時に泣いている姿は可愛いと思う。びっばらんの分離時に担当学生でなく、母親を求めてくれて嬉しかった。 ・普段子どもとずっと一緒にいるため、子どもと離れて安心する。離れたい気持ちの方がすごく強い。 ・人見知りしない子のため、離れることに関して心配はなかった。
	びっばらんについての内容	108 学生が中心になって子どもと関わることに感じる	・不安や心配は全然ない。お姉さんがたくさんいるから行っておいでという感じ。 ・近所のお姉さんと遊んでもらうこともあまりないため、すごくありがたい。 ・子どものことについて細かく様子を教えてもらえるため、心配はしていない。 ・学生だからという事は全くないが、学生と親の間でお互いに緊張はある。 ・心配事があった時、「全然大丈夫ですよ。」と言ってもらえて安心した。
		109 今後のびっばらん活動に期待すること	・夫も参加できるようなこと ・4回で終わらず、1か月に1回継続して行いたい。歌ったり、踊ったり、体操があったら楽しい。 ・思い切り走れる場所が少ないため、思い切り走ったり、階段の上り下りをしたりするだけでも十分楽しい。 ・基本的な生活習慣について子どもに楽しく教えて欲しい。 ・夏ではなく、他の時期に実施して欲しい。 ・楽器を使う遊びをして欲しい。
子育てに関する感情	ネガティブな感情	110 子どもに対してイライラすること	・口内炎の時、薬をもらってからもずっと痛いと言っているのを見て、イラッとした。
		111 夫に対してイライラすること	・母親が必要とする援助をしてくれない。(出かける時の準備、お風呂等) ・考えたら分かることも全部聞いてくる。 ・育児でして欲しいことを言うとしてくれるが、全部適当にされる。 ・母親の思いやして欲しいことと違うことをする。
	ポジティブな感情	112 子どもがいることで感じる幸せ	・夫が仕事で夜1人であることが多かったが、今は子どもがいて、寝る時も何も言えない幸せを感じる。
学生に向けてのアドバイス	母親自身の想像と違ったこと	113 出産について	・高齢出産のしんどさ。自分達だけでなく、周りの家族が若くて助けてくれるうちに計画的に早めに産んで欲しい。 ・子どもが欲しいのであれば少しでも早めに産んでおいたほうが良い。
		114 結婚について	・結婚相手との年の差は良い面も悪い面も。夫の体力がなくなっているのを感じているため、できれば同じくらいの年齢の方が良いかもしれない。 ・男性の方が体力があるイメージだが、実際は違うこともある。 ・家事をしてもらうために早めに夫に言う。(結婚を決める際)相手の親を見る。 ・何でもしてもらうのが当たり前という考えの人に1から教えるのは大変。1人暮らし経験のある人が良い。

松本（2019）は、2018年度と同様の手続きで、「おしゃべり・さろん」に同席して内容を録音した後、逐語録化したものを分析している。ただし、2019年度の「おしゃべり・さろん」については、ファシリテーターから事前に話題にしたいことを母親に尋ねている点と、別の学生による質問紙調査もおこなわれた点は、2018年度と異なっている。そのため、松本は「おしゃべり・さろん」という対話の場をフォーカスグループとして捉えて以下を目的として分析を行っている。

1歳児と3歳児をもつ母親の対話の中でどのような語りが発展されたのかを分析し、母親間の「対話の場」の意義を明らかにすることを目的として研究を行った。

対話内容としては、申込時に「おしゃべり・さろん」で話題にしたいことを母親に尋ねた以下のものと、学生からの母親への質問をふまえて、ある程度話題を決め、ファシリテーターによって進められた。

- ・2人の子どもの育児やきょうだいとの関わりについて
- ・子どもの食事について
- ・京都市の子ども医療について

- ・家庭での遊び
- ・習い事の手配
- ・手足口病について
- ・子育ての疑問点に他の方の経験談、アドバイス

松本による逐語録のカテゴライズの結果、対話内容は4つのカテゴリーと8つのサブカテゴリー、14個のコードで構成されている（表4）。

また、松本は14個のコードを用いて母親の発言回数を数えている（表5）。質問紙調査の結果からは、子育てについて相談する人について母親達が相談する頻度が高いのは、実母、子育て友達であることが明らかとなった。

松本の研究結果では、母親同士の対話の場は、体験談を語り合うことにより、様々な視点からお互いにアドバイスしながら助け合うことができるという点で母親にとって非常に意義があるとしている。加えて、母親の生の声を聞くことができるという点で支援者にとっても意義のある場であるとしている。

3. 倫理的配慮

本研究の協力者である「ぴっばらんシリーズ」参加者には、申し込み時に参加時の様子を撮影

表5 2019年度「おしゃべり・さろん」における各コードの母親の発言回数（松本, 2019を瀬々倉が改定）

コード		母親の発言回数
101	手足口病について	24
102	口内炎について	8
103	上の子に関わる問題	11
104	子育て支援事業の利用について	2
105	居住市について不満に感じる事	7
106・211	子育て支援機関の利用状況と利用時の子どもの様子	16
107・212	子育て支援機関利用時に親子分離する時の母親の心情	14
108	学生が中心になって子どもに関わる事について感じる事	8
109・214	今後のぴっばらん活動に期待すること	14
110	子どもに対してイライラすること	1
111	夫に対してイライラすること	23
112	子どもがいることで感じる幸せ	2
113	出産について	7
114	結婚について	8

表6 2018年度の「おしゃべり・さろん」における母親の対話のカテゴリズ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	対話内容
子育てに関する悩みの共有	子どもの泣き	201 対応方法	・理由によって対処方法を変えている。 ・眠たくて泣いている時、寝たふりをして寝てくれるのを待つ。 ・1対1で泣かれる経験がなく、嫌になったら夫や親に「お願い」と言って渡す。 ・ほっとくほうがすぐ泣き止むので、イヤイヤや癇癪を起こして泣いているときはほっておく。
		202 他児との比較	・少し身体が弱くよく寝ることもあり、泣いたことが少ない。しかし、きょうだいのようにいつも一緒に過ごしている同級生の女の子は寝ず、よく泣く。
		203 泣きに対する母親の感情	・新生児の時は泣いている理由がわからず、つらかった。 ・1対1で一緒にいる時は癇癪を起こし、起きる寝る時も泣くが、外(複数大人がいるところ)や夫の前ではすごいお礼口さんで泣かないため、周りから「育てやすいね」と言われ、育てにくさ・育児のしんどさを理解してもらえず大変な思いをしている。⇒同じ境遇のお母さんを紹介する。
	育児制度 育児環境	204 大家族での子育て	・歳の離れたきょうだいがお互い同居しているため、1対1で嫌なことがあれば、母親以外の家族のところに行く。 ・前回の出産と違いはあるか？きょうだいは、手伝ってくれるか？⇒数年ぶりの出産で育児用品が全然違ったり、育児について忘れていたが、歳の離れたきょうだいがお風呂に入れたり、おむつを替えてくれるので、環境としては育てやすい。
		205 母親同士で話す機会の有無	・母親同士だけで話す機会はあまりない。 ・いつも近くに子どもがいる。 ・子どもに食べさせながら、母親同士ランチする。 ・子どもが飽きる前に退散する。
		206 日本と欧米の育児	・欧米ではクリスマスがとても重要な行事で、子どもが赤ちゃんの時からクリスマスにお金をかけないといけない。
	家庭での決まり事や子どもの様子	207 キャラクターへのこだわり	・キャラクターにはまってほしくなくて、家では一切見せてこなかったが、スーパーに行き見つけてはまっている。 ・家にアンパンマンはいない。 ・テレビを見せるだけ？⇒テレビも見せない。小児科にアンパンマンがあるので、子どもにとって病院に行くとき余る存在にしている。 ・キャラクターものを置くとき家の中がごちゃごちゃする。服についても子どもからどうしても要望がない限りは、あえて親からは買わないようにしている。 ・私や夫のキャラクターの好き嫌いによって、買うか買わないか決まる。
		208 おもちゃについて	・身内が木のおもちゃを作る仕事をしているので、木のおもちゃはたくさんある。 ・おもちゃがあまりない。あって木の積み木やレゴのデュプロ、動物のフィギュア。 ・おもちゃは増やさないように意識している。 ・おもちゃを片付けなくて外に行けないようにしている。 ・おもちゃは2人の子どもを持つ姉からもらっており、あまり買わない。 ・イベントの時はおもちゃをあげたいと考えているが、夫がボンボンおもちゃを買ってくるので家の中におもちゃの区画を作っている。 ・図鑑を買うと自分から本を読むようになったので、本を与えるのはいいと思う。
		209 テレビについて	・テレビをずっとつけていないためあまり見ることがないが、小さい頃からお気に入り番組を録画したNHKの時間の短い番組を延々と見る。 ・しまじろうは見てる？⇒ちょっと見るようになった。 ・テレビを見る時遊びに行ったりしながら見ているので、長い間ちゃんと座って見れるかな？ ⇒アンパンマン、じゃあぜひ試してみてください。 ・『デザインあ』や『ピタゴラスイッチ』に出てくる音のまねをしている。
		210 子どものだだこねについて	・小さい頃からダメなものダメと言っているため、だだこねしても無理なことがわかっている。 ・私や祖父母とおもちゃ屋さんに行くとき、わあ一つでなるのはわかっているため、おもちゃ屋さんにはあまり連れて行かない。 ・大きいものを貰うのは誕生日やイベントの時しか与えない。 ・ダメ親だと思いが、子どもが欲しいもの(アンパンマンのおもちゃや服)は何でも与える。みんなの話を聞きしかりしないといけないと思った。⇒それで自分で着てくれるならいいと思う。そこまで好きなら全然いいと思う。
子育て支援機関の利用	子育て支援機関利用時の親子の姿	211 (106) 子育て支援機関等の利用状況と利用時の子どもの様子	・イベントをやっている児童館を探し、児童館を利用している。 ・室内のスペースでは遊びきれず外で遊ばせたいが、暑さが心配で室内の施設を利用している。 ・どこを利用していますか？⇒ショッピングモールAやショッピングモールB。施設の利用料が高い。 ・人気の施設は人が多くおもちゃの取り合いやケンカが起こるので、人の少ない施設を利用する。 ・午前中児童館で遊ぶと、午後からは帰って寝る。 ・設備はよいが人の多い施設を利用すると、菌が多く子どもが風邪をひく。 ・市がやっている一時預かりに入れない。3カ月や半年待ち。 ・認可外の施設に1日のために高いお金を払ったり、布団など全部用意しないといけない。 ・そこまでして一時預かりを利用したいとは思わない。 ・急に預かって欲しい時があるのに1カ月前に希望を出してと言われる。 ・それその区内ですか？⇒そうです、この辺全体です。 ・慣れないところに預けると子どもが熱を出した。
		212 (107) 子育て支援機関等利用時の母親の心情	・自分ですごい用があったわけではないが、とりあえず1回預けてみようという感じ。 ・1歳前くらいに一時預かりを利用し、子どもは泣いたが全然いけたので「良かったー」になった。 ・前回の一時預かりから半年後もう一度利用すると家でのリズムが崩れ、次の日でもしんどかった。 ・分離できたら、時間を気にせず掃除や買い物したい。 ・分離とまではいかないが、2歳になると映画間や自宅で長時間集中して映画を見れるようになり、その間自分は寝ることができ楽になった。
	びっばらんに ついての内容	213 びっばらんの魅力	・少人数だから遊び放題。 ・子どもはわがまま言い放題。 ・至れり尽くせりしてもらっている。 ・子ども1人に先生(学生)2人くらいついてくれる。 ・母子分離なのが魅力。
		214 (109) 今後のびっばらん活動に期待すること	・自宅では手間がかかりできない活動や広い場所ではできない活動。例えば、ビニールプール。 ・こめこ・かたくりこねなどの活動のように、持ち帰り自宅でもまた遊べる活動。 ・家では準備が大変なので、季節の行事を取り入れた活動があればよい。

し、教育研究や広報に活用することに同意を得ている。さらに、「おしゃべり・さろん」実施前に、研究への協力を依頼し同意を得ている。また、質問紙は記名式で行っているが、個人情報の保護には十分に注意しており、全てのデータは適切に管理している。なお、個人情報保護の観点から、参加者の情報を一部加工している。

4. 結果

4.1 対話内容のカテゴリライズ

松本（2019）のカテゴリライズを参考にして、2018年度の「おしゃべり・さろん」での母親の対話内容を再分析した結果、2つのカテゴリと5つのサブカテゴリ、14個のコードにカテゴリライズされた（表6）。松本（2019）のカテゴリライズには該当しないサブカテゴリが確認されたので、表6では新たなサブカテゴリを作製した。また、表の6のコードを用いて母親の発言回数を数えている（表7）。

4.2 カテゴリ毎の対話内容

カテゴリごとに対話内容を分析した結果、どのコードの対話内容においても特定の母親が先導して対話を進めるのではなく、それぞれの

話題についてファシリテーターや学生が尋ねた際に、母親が順に答えていくという流れで対話が進行していったことがわかる。また、対話は母親とファシリテーターとの1対1のやりとりではなく、他の母親が話していた内容に触れたり、共感したり、質問やアドバイスしながら、母親間で対話が進行している。母親間で対話する交流の場において、育児に関する情報交換を行ったり、育児における経験談について語ったり、育児のしんどさを共有することで、母親間でのピアサポートが成立していることが確認できる。

5. 考察

5.1 2018年度・2019年度のカテゴリライズにおける対話内容の質

今回再分析したカテゴリライズにおいて、【子育てに関する悩みの共有】と【子育て支援機関の利用】の2つのカテゴリは、松本のカテゴリライズに該当することが確認できた。しかしながら、サブカテゴリに関しては、[育児制度育児環境] [子育て支援機利用時の親子の姿] [びっばらんについての内容] の3つのサブカテゴリは該当したが、[子どもの泣き]と[家

表7 2018年度「おしゃべり・さろん」における各コードの母親の発言回数

コード		母親の発言回数
201	(子どもの泣き)対応方法	19
202	(子どもの泣き)他児との比較	13
203	泣きに対する母親の感情	33
204	大家族での子育て	35
205	母親同士で話す機会の有無	7
206	日本と欧米の育児	4
207	キャラクターへのこだわり	54
208	おもちゃについて	31
209	テレビについて	44
210	子どものだだこねについて	21
211・106	子育て支援機関等の状況と利用時の子どもの様子	91
212・107	子育て支援機関等利用時の母親の心情	30
213	びっばらんの魅力	10
214・109	今後のびっばらん活動に期待すること	18

庭での決まり事や子どもの様子]の2つは該当しなかった。

ここでは、2018年度・2019年度の「おしゃべり・さろん」の対話内容の中で、母親の感情について語られた対話に注目し、対話内容の質を比較する。2018年度において母親の感情について語られている対話は、[子どもの泣き]の<泣きに対する母親の感情>での対話である。また、2019年度において母親の感情について語られている対話は[ネガティブな感情]の<子どもに対してイライラすること>での対話である。

[子どもの泣き]では、<対応方法><他児との比較><泣きに対する母親の感情>について語られている。母親の発言回数は、<対応方法>が19回、<他児との比較>が13回、<泣きに対する母親の感情>が33回である(表7)。3つのコードの母親の発言回数を合計すると[子どもの泣き]について母親の発言回数は65回にもなっている。最初の対話では、子どもの泣きに対してどのように対応しているか母親間で発言し共感し合いながら語り合っていた。語り合いが進行すると、MoA(母親A)は自分の子どもの泣きと仲の良い同級生の泣きとを比較していた。MoAは対話の中で、自分の子どもの繊細な部分(体が弱い)を周囲の母親に伝えている。

また、子どもの泣きに関して対話が発展していくとともに、ファシリテーターがS・フライバーグの「赤ちゃん部屋のおばけ」について話したところ、MoB(母親B)は「わかります。」と反応し、子どもの泣きに関して抱えている悩みについて語り出した。MoBは「1対1で一緒にいる時は痲癩を起こし、起きる寝る時も泣くが、外(複数大人がいるところ)や夫の前ではすごいお利口さんで泣かないため、周りから育てやすいねと言われ、育てにくさ・育児のしんどさを感じ大変な思いをしている。この育てにくさ・育児のしんどさをわかってほしい。」と語った。MoBは普段の子育てで感じている育てにくさや育児のしんどさを一人で抱え込んでいた。MoBは母親間で自由に対話できる場にお

いて、他の母親と対話を通じて交流が発展したことにより、自分が抱えている育児不安やしんどさを吐露することができた。[子どもの泣き]に関する対話において、母親が心の内面をさらけ出すほどの深い対話が行われたことが確認できる。

しかしながら、表4で示している松本が作成した2019年度に実施された「おしゃべり・さろん」の対話内容のカテゴリでは、2018年度のように母親が抱えている育児不安やしんどさを吐露する語りは確認できなかった。その代わりに類似するカテゴリーとして【子育てに関する感情】の中のサブカテゴリーとして[ネガティブな感情]が語られた。

[ネガティブな感情]として<子どもに対してイライラすること>は「口内炎の時、薬をもらってからもずっと痛いと言っているのを見て、イラっとした。」1回のみに対して、<夫に対してイライラすること>は23回もあり、「母親が必要とする援助をしてくれない。」や「考えたらわかることも全部聞いてくる。」などが語られた(表5)。

2019年度の対話内容において、子育てに関するネガティブな感情について語られてはいるが、母親が抱えている育児不安やしんどさについては語られておらず、あくまでも子どもや夫に対してイライラすることにとどまっている。

以上のことから、2018年度・2019年度の「おしゃべり・さろん」での母親の対話内容において、母親の感情について語られた対話内容に注目して比較した結果、2018年度と2019年度の母親の対話では対話内容の質が異なることが明らかとなった。

5.2 対話内容の質に影響を与えた要因

2019年度の母親の対話では、母親が子育てで感じるネガティブな感情として「イラっとする」と語っている。それに対し、2018年度の母親の対話では、「育てにくさ・育児のしんどさをわかってほしい」と語っている。2018年度・2019年度の母親の対話内容を比較した結果、2018年度の母親の対話は、母親が抱えている育児不安やしんどさを吐露し、感情をさらけ出すような

対話であったことが明らかとなった。

また、2018年度・2019年度のコードごとの母親の発言回数の比較した結果、母親の感情について多く語られているのは、2018年度の母親の対話であることが明らかとなった。

したがって、2018年度・2019年度の「おしゃべり・さろん」での母親の対話内容において、母親の感情について語られた対話内容に注目して比較した結果、2019年度の母親の対話より2018年度の母親の対話のほうが、母親が心の内面を吐露しており、母親の感情に関して語られる発言回数も多かったため対話内容の質が深いことが明らかとなった。

比較検討の結果より、対話内容の質に影響を与えた要因の1つとしてファシリテートの違いがあったことをふまえて考察を行った。ファシリテートのあり方の違いから、前川は2018年度の「おしゃべり・さろん」をピアカウンセリングに近いと捉えているのに対し、松本は2019年度の内容をフォーカスグループ・インタビューと捉えている。

対話の場において、母親に対し普段の自己を振り返ってもらい内省する機会や一人で抱え込んでいる心の内面にある感情を吐露できる機会を提供しようとする場合には、ファシリテーターは事前に対話内容の多くを決めず、当日母親が話したい話の流れに沿いながら対話できるよう、ピアカウンセリングを意識した進行をするのがよいだろう。

また、対話の場において、母親が希望する子育てに関する知識の提供や、母親同士で情報共有する機会を提供しようとする場合には、フォーカスグループ・インタビューを意識してファシリテートするといった工夫の必要がある。

6. 結論

2年分の「おしゃべり・さろん」の内容を再分析した結果、同一人物によるファシリテートにもかかわらず、そのあり方によって参加者間で語り合われる内容の質や展開が異なることが明らかになった。2018年度と2019年度の参加者は全員が同じというわけではないので、母親

同士の語り合いの内容にファシリテートのあり方のみが影響しているとは断定できない。しかしながら、同一人物によるファシリテートであっても、その進行方法によって語り合いの質に影響があることは示唆されている。今後の養育者同士の語り合いにおいて、参加者にどのような場を提供するか、その都度検討することが必要である。

文献

- 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃・河内十郎 (2020) 心理学[第5版補訂版], 東京大学出版会, p.167 L 8-10
- 厚生労働省 (2015) 人口減少社会に関する意識調査, p8 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/001_1.pdf (2020/11/ 5 閲覧)
- 厚生労働省 (2019) 子ども・子育て支援 地域子育て支援拠点事業について 地域子育て支援拠点事業実施状況, 令和元年度実施状況, p.1 <https://www.mhlw.go.jp/content/000666541.pdf> (2020/11/ 8 閲覧)
- 佐藤有耕・落合良行 (1995) 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴, 筑波大学心理学研究, 第17号, p.62 L22-23
- 瀬々倉玉奈 (未刊行) 2020年度及び2021年度実施のオンラインぴっばらん活動参加者を対象としたアンケート結果
- 瀬々倉玉奈 (2020) 子ども・子育て支援に関する実践と研究を通じた学生の学び, 京都女子大学教職支援センター紀要第2巻, Pp.75-83
- 瀬々倉玉奈 (2018) 乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成—京都女子大学 親子支援ひろば ぴっばらん—, 京都市「学まち連携大学」促進事業活動報告書 2017, Pp.17- 1
- 瀬々倉玉奈 (2013) 子育て教室における養育者間 スタイグと託児—親子分離の逆説的効果— FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌第6号, Pp.36-47
- 内閣府 (1997) 平成9年度 国民生活選好度調査 女性のライフスタイルをめぐる国民意識—勤労, 家庭, 教育, <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10361265/www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/98/19980219c-senkoudo.html> (2020/11/11 閲覧)
- 内閣府 (2015) 地域子ども・子育て支援事業について, p.13 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h270123/pdf/s 3-1.pdf> (2020/11/15 閲覧)

- 中谷奈津子 (2014) 地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化—支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して—, 保育学研究, 52 巻, 3 号, 日本保育学会 Pp.319-331
- 西本佳世 (2021) 母親の語り合いにおけるファシリテーター「おしゃべり・さろん」の再検討, 令和元年度児童学科卒業論文 (未刊行)
- 橋本翼 (2017) 保育所における保育所と保護者の「対話の場」による子育て支援の可能性—母親の語り合いの分析を通して—, 近畿大学九州短期大学研究紀要 (47), Pp.124-135
- 前川由梨奈 (2018) 親子分離による母親グループの語り合いの分析, 2018 年度京都女子大学発達教育学部児童学科卒業論文 (未刊行)
- 松本愛理 (2019) 親子支援における保護者の「対話の場」の意義: フォーカスグループ・インタビューの分析を中心に, 2019 年度京都女子大学発達教育学部児童学科卒業論文 (未刊行)

謝辞／付記

「ぴっばらんシリーズ」に参加し, その記録を教育・研究に活用することに同意して下さった皆様に感謝を申し上げます。

本稿は, 筆頭筆者の西本 (2021) を基に, 第 2 筆者である瀬々倉が加筆修正し更に再構成したものです。なお, 分析対象である「おしゃべりさろん」のファシリテーターは, 瀬々倉が務めています。